

05R eport

GS 連続シンポジウム 2009
まちづくりへのブレクスルー このまちに生きる

第5回 2010年7月23日(金) 16:00~19:00 於：東京大学工学部1号館土木設計演習室 まちなみを守り、むらなみを育てる - 愛媛 内子 報告レポート



まちなみ30年説

川添 善行



平成二十二年七月二十三日、GS連続シンポジウムの最終回となる「まちなみを守り、むらなみを育てる 愛媛 内子」が東京大学にて開催された。基調講演には、内子町町役場を退職された岡田文淑氏と石畳地区より亀田強氏のお二人をお招きした。前回までと同様、会場は土木設計演習室。普段は、学生たちが設計課題に取り組み、制作に汗を流す場所である。この場所を、GSユーザー有志の面々が、遠く内子から私どもの趣旨に賛同し、馳せ参じてくれた岡田・亀田両氏を迎える場所作りを担ってくれた。



内子は、私がこの連続シンポジウムを担当してから、最後はこの方々、と当初から心に決めていた事例である。高度成長期にあって、自らのアイデンティティであり、最後のよりどころをなんとか次世代へ残そうという思いから始まったまちなみ保存と、むらなみへの展開。それを貫徹する意思。まちなみを考える上で欠かせないすべての要素が内子には揃っている。



私は、最近、「まちなみ30年説」ということを考えている。これは、今回の全5回の連続シンポジウムを通して私が体感したことである。いきいきとしたまちなみが生まれるには、およそ30年の時間を要する。まちなみのことを憂い、行動する人があらわれ、広がりをもち、そこで暮らす人々の営みが定着するまでの時間である。林寛治、片山和俊、住吉洋二の3名が金山のまちづくりに揃って登場したのが、1986年。小布施の現在の骨格を形作る篠然楼周辺修景事業が行われたのが、1982年。竹富島のまちなみを守るため竹富島憲章がつけられたのが、1986年。宇治の宇治橋通り商店街が現在の活動をはじめたのは、2000年（宇治のまちの骨格が形成されたのは平安時代にさかのぼるが）。内子で八日市周辺町並保存会が発足したのは、1976年。やや年にばらつきはあるものの、金山、小布施、竹富、内子のそれぞれがほぼ時を同じくして、自分たちのまちなみを再発見し行動し、ほぼ同じくらいの時間が経過している。



当時、どのような想いでまちなみに想いを寄せたのか。そこに何を映し込んでいたのか。七十年代から八十年代、ちょうど時代が自らの行く末を見出そうとしている中で、発見されたまちなみ。この30年という時間は、一世代が経過したことも意味する。先駆者達が作り上げたまちなみが、うまく次世代にバトンタッチできるかどうか。持続するまちなみとは何であるか。私たちの直面する課題は、まだまだ予断を許さない。

GSデザイン会議



GROUNDSCAPE DESIGN INSTITUTE